

「私の山旅、天山&アルタイなど」

ーハン・テングリ (7010m)、ベルーハ峰 (4506m) 他ー

坂上 光恵

日本山岳会海外委員/ 千葉支部、パミール・中央アジア研究会

1989 年にテンシャンが外国隊にも開放される、と聞いてはいたが、まさか直ぐにそのチャンスがやってくるとは思ってもいなかった。それは、知人が代表を務めるある旅行社が「山岳ツアーを出したいので下見に行かないか」という話だった。ハバロフスクからアルマ・アタに国内線で行ったのだが、途中、バルナウルという聞いたことのない空港に給油のため降りた。そこが、後に行くことになるアルタイ山脈に入る最寄りの空港だったのである。

以前、エルブルースに登った時も、ソ連の山に登る時は、まずモスクワの中央スポーツ委員会に申請し、そこから各共和国のスポーツ委員会に連絡が行くようになっていた。ロシアになってからは勿論それぞれの国に旅行社ができ、たいへん行き易くなった。

初めてのテンシャンは、南テンシャンにあるタルガル峰であった。その年、日本の鈴鹿高校山岳部の遠征隊が中国を越えてやってきた。彼らは西峰に、私達は東峰に登ることになっていた。登頂の日、予定より遅れたが頂上に立て、急いで下る時、メンバーの一人がクレヴァスに落ち、救出に時間がかかり、暗い中やっとテントに戻った。

1995 年、中央テンシャンのハンテングリに南面（キルギス側）から行った時、メンバー 一人が両手指に凍傷を負い、日本で指先を切ることになってしまった。それ以後は装備、特に凍傷に発展する可能性があるものには気を遣うようになった。また、その時 C2 の直下で大きな雪崩が起き、何人もの人がのみ込まれるのを目撃した。危険はいつでもそばにある、と実感したものである。

チャンスは逃すな！をモットーにしているうちに、テンシャンにはその後もあちこち登る機会に恵まれるようになった。そして現地の人達は勿論、遠征にきた日本隊の方々とも親しくなり、今だに国内で山スキーに一緒に行ったりしている。

その後、いろいろな国に行くようになったが、2003 年、以前から気になっていたアルタイのベルーハに行こうと思い、ある旅行社に相談した。入るのが面倒なので、ツアーとしては成り立たないが、何とか考えてみましょうということで、トレッキング隊やメンバーも声をかけてくれ、ヘリコプターを使えることになった。アルタイ地域はまだ山の専門家は少ないようで、ポーターとしては体力的に OK であったが、技術的にはサクトペテルブルグから来たガイドがしっかりしていた。

ロシア国内の山に行くには、ロシアの人達と行くのが一番安全で、カフカス、南カフカスのベゼンギ地域、グルジアとの国境の山にもロシア側から行ったが、国境に近いところでは、軍の入山許可や事故の時の救出要請をする役所に行く必要がある。山中に銃を持った兵がいるときもある。陸域で国境が接していない私たち日本人には、「何故こんなところにまで」と異様に思う位、恵まれているということであろう。

海外の山に出かけるようになり、最初の頃は行くだけで満足していたが、貴重な休みを使うので、自分に合った山と行きたい山を、自分のペースに合わせて登るように変え、登頂の成功率

を上げるようになった。レーニン峰(7134m・キルギス)、国際公募隊で自分に合わせて登ったムスターグ・アタ(7546m・中国)を始め、しっかりした技術のロシアやネパールのガイドと山や山スキーに行き、楽しむこともできるようになった。

一緒に山に行き、ガイドしてくれた何人もの登山家が、山で帰らぬ人となったのは、本当に残念である。

いろいろなことに興味・関心を持ち、これからも安全な登山を続けて行きたいと思っている。

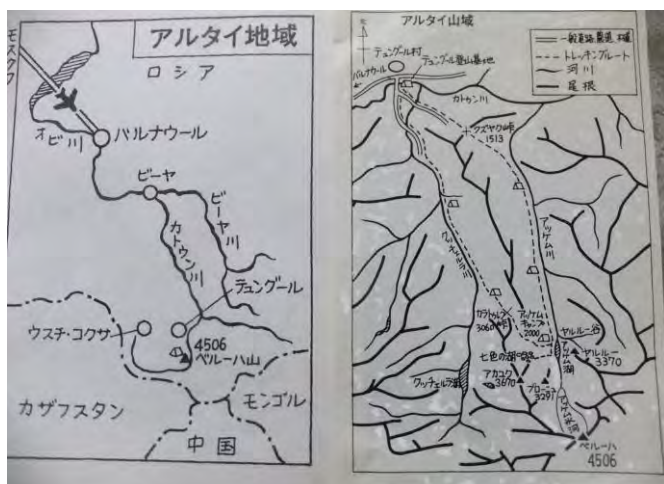
私の山旅 (海外編)

1989年	8月	タルガル峰 (南テンシャン・ソ連)	4878m 登頂
1990年	5月	スメルー山 3676m、プロモ山 2382m (インドネシア)、アグン山 3142m (同バリ島)	登頂
1991年	12月	山スキー (チンブラク) (南テンシャン・ソ連)	
1992年	5月	ハンラ山 (韓国)	1950m 登頂
1993年	8月	白頭山 (長白山) (中国)	2744m 登頂
1994年	8月	コリサイ三湖 (カザフスタン)	
1995年	7月	・ ハンテングリ (南面、登山) (キルギス)	7010m (6995m)
	12月	ロライマ山 (ヴェネズエラ)	2810m 登頂
1996年	5月	キナバル (マレーシア)	4094m 登頂
	8月	・ ハンテングリ (北面、登山) (カザフスタン)	7010m (6995m)
1997年	8月	バヤンコル、11 th peak (テンシャン・カザフスタン)	5791m 登頂
1998年	8月	・ ポベーダ (キルギス、登山)	7439m
1999年	7月	モンブラン他 (フランス)	4808m
2000年	8月	ハンテングリ (北面) (カザフスタン)	7010m (6995m) 登頂
2001年	8月 (冬期)	コジウスコ (オーストラリア)	2230m 登頂
2002年	8月	・ ゲストラ (ベゼンギ・ロシア、登山)	4859m
2003年	8月	ベルーハ (アルタイ・ロシア)	4506m 登頂
	12月	タスマニア・オーバーランド〜クレイドル山・オッサ山 (オーストラリア)	
2004年	8月	ピーク・ワルシャワ 3739m、ウキュウ 4334m (ベゼンギ・ロシア)	登頂
2005年	3月	キリマンジャロ (タンザニア)	5895m 登頂
	8月	レーニン峰 (キルギス)	7134m 登頂
	10月	玉山 (台湾)	3997m 登頂
	12月 (夏)	Mt. Cook (ニュージーランド)	3754m 登頂
2006年	8月	ムスターグ・アタ (中国)	7546m 登頂
	10月	エルブルース、ドンバイ山城 (ロシア)	5642m 登頂
2007年	3月	オートルート 山スキー(シャモニーからツエルマットまで) (フランス)	
	8月	バルトロ氷河、K2 BC まで (パキスタン)	
	12月	五指山 (海南島・中国)	1876m 登頂
2008年	3月	アバチャ山・山スキー (カムチャッカ・ロシア)	2741m
	7月	マーブルウオール峰 (テンシャン・カザフ)	6400m 登頂
	8月	ドロミテ山城 マルモラーダ 3340m他 (イタリア)	
	12月	アコンカグア (アルゼンチン)	6960m 登頂

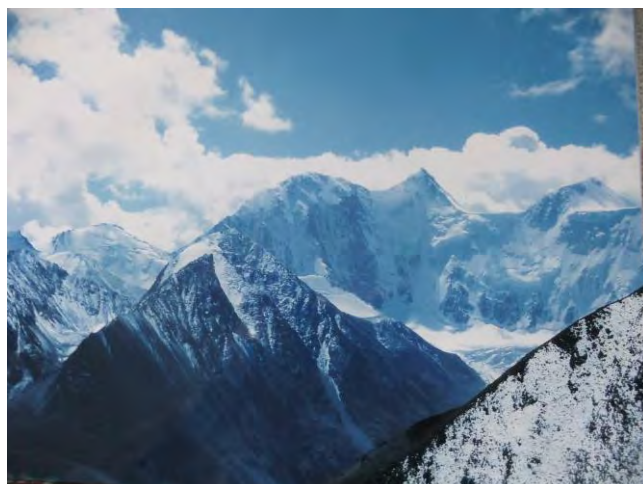
2009 年	3 月	キルギス 山スキー	
	8 月	14ers (フォーティーナーズ) (コロラド・アメリカ) 4000m 以上の山 52 座中 8 座登頂	
	12 月	オーストリア南チロル 山スキー (オーストリア)	
2010 年	3 月	チェベダレ山城 山スキー (イタリア)	
	8 月	カズベキ山 (ロシア側から)	5047m 登頂
	12 月	カラパタール (ネパール)	5545m
2011 年	3 月	ノルウェー 山スキー	
	8 月	チュルー最東峰 (ネパール)	6038m 登頂
	9 月	アララット (トルコ)	5123m 登頂
2012 年	3 月	アイランドピーク (ネパール)	6160m 登頂
	8 月	ギリシャ縦断 オリンポス山	2917m
	10 月	エヴェレスト街道トレッキング (ネパール)	
	12 月	アンデルマット 山スキー (スイス)	
2013 年	3 月	コーラ半島 山スキー (ムルマンスク・ロシア)	
	8 月	モンテローザ (イタリア側から) 4808m、メンヒ 4099m 他 (イタリア・スイス)	
	12 月	ドロミテ・スーパースキー (イタリア)	



ハンテングリ (7010m) 北側 BC



ベルーハ峰 (4505m) 概念図



ベルーハ峰

ペルーハ登頂記

坂上光恵



まだソ連の時代から、中央アジアのテンシヤン山域を何回か訪れているが、その頃から地図を広げると気になる山があった。テンシヤンから北の山域を見ていくとアルタイ山脈があり、そこにひとつ山がはっきりと記されている。かなり大きな地図でも出ているので調べてみると、シベリアの最高峰である。いつか行ってみたい山のひとつとなり機会を待っていたところ、なんとか今年行けるチャンスがやってきた。しかし、山域がシベリアとモンゴル、カザフスタン、中国の国境をまたいでいるため、どこから入るかが問題になった。カザフ側とロシア側からのどちらにするか検討していたところ、運よく外国隊とヘリコプターを片道ずつ使い合うことができるとわかり、ロシア側から入ることになった。

7月27日、成田からモスクワへ。モスクワでその晩発の国内線夜行便に乗換えバルナウル（地図参照）へ翌朝着。ここからアルタイ山脈の玄関ゴルノ・アルタイスクまで4時間のドライブ。途中、道路脇の屋台で昼食のシャシリク（串焼き肉）に舌鼓をうちながら登頂隊7名とトレッキング隊6名は、早く山を見たい気持ちに駆られる。ゴルノ・アルタイスクからはヘリでひとつ飛び、アツケム湖畔のBC（ベースキャンプ）へ着く予定、だったが、山が近づくにつれ雪となり視界がきかずヘリはBC着陸をあきらめ、ペルーハ山麓の村テュンゲールに臨時着陸。思わぬ天候待ちでここに2泊もすることになった。

7月30日霧。BC方面は晴れとのことでようやくヘリが飛んだ。わずか30分で着いたアツケム湖畔は、真夏のはずが全て真っ白に雪で覆われ花も可哀相な風情である。BCにはサウナもあり、テント泊も快適そうだった。午後、足慣らしに桃源郷「シャンバラ」伝説のあるヤルルー谷に出

かけたが、天候がいつまでもつかわからないのと、アツケム湖の背後で我々を待ちわびるのかのように登るペルーハに早く近づきルートをしつかり見たい気持ちに苛まれ、相談の結果、予定を一日早めて明日C1に上ることにする。夜、初めて同行ガイド（レスキュー隊員も動員）7名全員と顔合わせ。いかにも強そうである。

翌朝、トレッキング隊と別れ荷作りをして14時BCを出発。アツケム湖を過ぎ2145m地点のモレーン横にC1設営、泊。

翌8月1日9時C1発。モレーン横を登り16時30分トムスキエ・ノチェフスキー避難小屋（3060m）着。眼前に迫る大モレーンに圧倒される。見上げれば「アルタイ槍ヶ岳」とでも言いたいようなペルーハが真上にある。C2設営。

8月2日7時C2発。すぐにアイゼン、ハーネス、ヘルメットを装着。雪は締まっており歩きやすい。3160m地点でいよいよ第一の難関デローン峠（3400m）へ雪壁の登攀開始。ガイドがザイルを次々に張るので休む暇もなく5ピッチ半を必死に登る。斜度は40～45度、2時間半かかって全員がこの峠を越した。峠を越してホッとすると今度は向こうにC3設営予定のセディオ・ペレスコボ峠が見える。ペルーハの裏側に回り込むような感じだが、その前にメンス氷河を越えてプラトー上部まで上がらねばならない。15時30分にやっとC3（3500m）到着。8時間30分の行動だった。

8月3日、いよいよ登頂日である。4時30分、全員元気でC3発。3755m地点から急登が続く。次第に風が出てくる。4025mから3ピッチ、またユマールを使って急登する。上空の雲の流れが早く、天気の崩れが気になるがなかなか思うように上からず気がせく。やっと稜線に出、



ガイドと2人でアンザイレンしてさらに登る。13時40分、ついに頂上着。細長い頂上だが、右側は大きな雪庇になっている。慎重にその突端まで行ってみる。眼下にアツケム湖が見えた。間もなくカザフ側から天気が崩れてきて、雷鳴のなかの下りとなる。さらには雪と霧で視界も10m程になる。悪天候下、懸垂下降の連続で、C3に帰着したのは18時15分。長い一日だった。

翌日は天候も回復、デローン峠を慎重に下降してC2のトムスキエ小屋泊。次の日にはBCへ下り、サウナと夜のサヨナラ・パーティーをガイドたちと楽しんだ。地元のレスキュー隊員から「日本人の登頂は自分の知っている限り初めてだ」と言われ大喜び。7名全員が登頂できた喜びに重なる喜びになった。

*C1、C2、C3は前進キャンプ1、2、3の意味。
*ピッチはザイルを使う登攀箇所。1ピッチ約40m。
*アンザイレンは互いにザイルで結び合うこと。

ユーラシアツアーズ トロイカの旅 冬のロシア・パッケージ旅行のご案内

ニューイヤースペシャル・列車の旅②

この「ペルーハ登頂記」は、「ゆうらす vol 21」（2003年10月20日）から転載しました。

参考資料

- ・坂田恒衛 著「ユーラシア秘境の山旅、コーカサス編」ユーラシア・ブックレット No.12、東洋書店
- ・坂田恒衛 著「ユーラシア秘境の山旅、中央アジア・シベリア・極東編」

ユーラシア・ブックレット No.30、東洋書店